大阪商業大学学術情報リポジトリ

乳幼児向け絵本に関する考察ーこどものとも0.1.2.を中心にー

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学共同参画研究所 公開日: 2020-06-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浜崎, 由紀, 山田, 千都留, 内山, 三枝子, HAMAZAKI, Yuki, YAMADA, Chizuru, UCHIYAMA, Mieko メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/923

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

乳幼児向け絵本に関する考察

― こどものとも 0.1.2. を中心に ―

浜　崎　由　紀*
山　田　千都留**
内　山　三枝子***

１．はじめに

日本において、現在につながる乳幼児向けの絵本出版のきっかけとなったのは、1964（昭和39）年に福音館書店から出版された「うさこちゃんシリーズ」（ディックブルーナ作　石井桃子訳）であると考える。「子どもがはじめてであう絵本」というキャッチフレーズとともに「日本ではじめて出版された１歳半から楽しめる物語絵本」[1)] という言葉が、幼い赤ちゃんが楽しめる絵本と解された。これまでにない小さな扱いやすい形状・色使い・デザイン化された絵などが注目され、主人公のうさこちゃんは、愛らしいキャラクターとして商品化された。これに触発され、松谷みよ子は、童心社編集長の稲庭桂子、画家の瀬川康男らと共に、「赤ちゃんのための、ゼロ歳からの新しい絵本」[2)] 作りにとりかかった。松谷は、当時出回っていた乳幼児向けの安価で質の悪い絵本は見せたくない、０歳からの赤ちゃんのもの、外国の作家によるものではなく日本の赤ちゃんのために、質を落とさず、赤ちゃん絵本としての制約の中で追及したものを作りたいと考えた[3)]。こうして1967（昭和42）年、童心社から＜松谷みよ子あかちゃんの本＞シリーズの『いないいないばあ』『いいおかお』（松谷みよ子文／瀬川康男絵）が出版され、次いで1969（昭和44）年＜いやだいやだの絵本＞シリーズ（せなけいこ文・絵　福音館書店）、＜こぐまちゃん絵本シリーズ＞（わかやまけん画　こぐま社　1970〔昭和45〕年）等、日本の作家による「赤ちゃん絵本」（以下、鉤括弧を外して赤ちゃん絵本と表記する。）と呼ばれる絵本が相次いで出版されてきた。

2000（平成12）年の「子ども読書年」、2001（平成13）年の「子どもの読書活動の推進に関する法律」を機に始まった「ブックスタート運動」や保育所における乳児保育の増加、赤ちゃん学研究の高まり等の追い風もあり、現在も赤ちゃん絵本の出版が相次ぎ、その出版数は盛況

である。数多くの赤ちゃん絵本が出版されるなか、福音館書店の『こどものとも0.1.2.』は月刊絵本として、1995（平成７）年から休刊することなく現在に至るまで出版されている。2019（令和元）年12月現在、発行された『こどものとも0.1.2.』の冊数は、297冊である。

これまでに、『こどものとも0.1.2.』について取り上げた研究には、園田（2016）の「『こどものとも0.1.2.』『0.1.2.えほん』の研究－動物に関わる育児語とオノマトペを中心に」がある[4)]。「動物に関連した育児語とオノマトペに関する現代絵本の実態を明らかにするという日本語学的な目的」と「国語教育（母語教育）や日本語教育（第二言語教育）への研究成果の応用」として、月刊絵本『こどものとも0.1.2.』と『こどものとも0.1.2.』から厳選されハードカバー化された絵本、57冊を対象としている。

筆者らが、本研究において赤ちゃん絵本のなかでも『こどものとも0.1.2.』を研究対象に選んだのは、以下のことによる。

産まれてまだまもなく、実体験が少ない赤ちゃんを対象とした絵本を制作する場合、限られたテーマの中から絵本を創作していくことになる。当然のことながら、『こどものとも0.1.2』は月刊絵本のため、毎月１冊、１年間に12冊もの絵本が出版される。25年間継続して出版され、実際その内容の質は保たれているのかという疑問が湧いてきた。他の出版社も赤ちゃん絵本を次々に出版し、その形態や内容、表現方法は玉石混交、様々である。産まれて間もない赤ちゃんにこれほどたくさんの絵本が必要なのかと思うほどである。

そこで、本研究では、創刊号（1995〔平成７〕年４月）から現在（2019〔令和元〕年12月）に至る『こどものとも0.1.2.』を分析し、その特徴について明らかにしたい。

２．『こどものとも0.1.2.』について

『こどものとも0.1.2.』は、前述したとおり、1995（平成７）年、福音館書店から０、１、２歳児を対象に月刊絵本として出版された。毎号、『こどものとも0.1.2.』の本体の他、「折り込みふろく」が附録についている。「折り込みふろく」は、年度によって特集される内容やページ数が変わるが、「作者のことば」、「作者紹介」、「編集部だより（号によって「編集部より」と書かれているが、「編集部だより」と記す）」、「次号予告」が創刊当初から掲載されている。「作者紹介」「編集部だより」では、作者や編集部の作品や作者についての紹介があり、読者はそれによって、作者の作品制作の意図や背景を知ることができる。

本体のページ数は、表・裏表紙を含む22ページで、絵本の大きさは、実寸縦19.6cm×横

18.6cm（出版社公表20cm×19cm）、重さは、号数によっても変わるが、約190gから215gである。赤ちゃんが一人で持つには、大きさ、重さ共に理想の範囲を超えるが、絵本の大きさやそれに伴う重さは、絵本の内容ともかかわることがある[5)]。さらに、大人が子どもに読むことを前提として作られていることも推測できる。紙は、約１㎜弱の厚さのボール紙を使用し、角は丸くカットされている。加えて、インクは植物性のものを利用し、表紙は拭きとれるようコーティングされている。このように、赤ちゃんが触れても安全な配慮がされている。

『こどものとも0.1.2.』は、1956（昭和31）年に福音館書店が創刊した月刊絵本『こどものとも』の姉妹誌にあたる。『こどものとも』は、創作の物語を絵本にし、数々のロングセラー絵本を生み出してきた。他の姉妹誌として、1968（昭和43）年には４歳児を対象とした「こどものとも年中向き」を創刊、1977（昭和52）年には３歳児を対象とした「年少版こどものとも」を創刊した。『こどものとも0.1.2.』を加えると、０歳児から年長児まで、年齢ごとにシリーズ化されており、『こどものとも0.1.2.』を初めて出会う絵本の入り口として就学前まで『こどものとも』シリーズとともに育つよう子ども読者層の開拓にもなっている。

『こどものとも0.1.2.』が生まれたきっかけは、当時、編集にかかわった田中秀治によると「保育の現場や家庭から、赤ちゃんも誕生後1歳近くになると絵本を読んでやるのだが、ふさわしい絵本が少ないのでもっと出版してほしいという声が福音館書店に寄せられるようになった」[6)]からだという。そして、『こどものとも0.1.2.』を編集する際、「親が赤ちゃんと絵本をたのしみながら、それを媒体にして赤ちゃんに言葉をたくさんかけ、赤ちゃんが言葉を好きになってほしい。（中略）赤ちゃんが言葉の楽しさや面白さをたっぷり味わえるシリーズにしたいと考えました。」[7)]と述べている。1990年代はインターネットが普及し始め、テレビやビデオなど映像文化が当たり前の時代である。親は映像文化のなかで育ってきた世代である。そしてその子もまた映像文化のなかで育つことが当然の世代である。そのような背景から、意図して『こどものとも0.1.2.』の編集方針に「親が赤ちゃんと絵本を媒介に楽しみ、言葉をかける」ことを求めていたと思われる。さらに、『こどものとも0.1.2.』の企画を考え始めた際、赤ちゃんがどのような絵本に興味を持ち喜ぶかを観察し、以下のことを絵本作りに反映してきたという。

・リズミカルで誘いかけるような呼びかけの言葉
・リズム感のある同じ言葉の繰り返しがあるもの
・言葉と一緒に、隠れているものが目の前に飛び出してくることにわくわく、ドキドキするような「いないいないばあ」のようなあそびを含むもの
・子どもたちは身近な「物」への強い関心をもっているため、動物や乗り物など身近な「物」

を描いた絵本

・本物をていねいに描いた絵―絵本の絵を通して、自分の知っている「物」を確認し自分のものにしていくもの

・自分たちの体験と重ね合わせることができる内容を選び、あかちゃんが絵本の登場人物に共感したり、自分たちとの違いを感じていくようなもの

・擬態語や擬声語のもつ響きやリズムの楽しさを描いた絵本

そして、「本の世界の入り口にいる赤ちゃんが、『こどものとも0.1.2.』を心から楽しみ、本好きな子どもに育つことを願っています。」と述べている。

さらに、『こどものとも0.1.2.』の創刊号の折り込みふろくに、福音館書店社長の佐藤克身が、創刊の挨拶として次のように述べている[8)]。

「赤ちゃんは何よりもまず、お母さんお父さんの語りかける暖かい言葉に耳澄ますことから、成長を始めます。（中略）騒音と機械の語る音にとり囲まれている現状であればあるほど、赤ちゃんが豊かに育っていくか否かの分かれ道になるようです。」

創刊当時、子どもを取り巻く環境を鑑み、親の肉声の言葉の大切さを伝えたいことがわかる。他方、「赤ちゃんの世界がまだまだ未知なる部分が多いために、この月刊絵本の創刊まで、長い試行錯誤を繰り返しました。」と述べている。赤ちゃん絵本の創作は難しく、未知の世界への挑戦であったことが窺える。

３．研究方法

1995（平成７）年４月創刊号から2019（令和元）年12月号までの297冊を取り上げる。１冊ずつ、作品の内容、表現の方法について、以下の項目に沿って分類し、各項目の全体数、年度ごと、月ごとの数、家族の登場数を調べた。創刊号発行からから現在までの25年間の変化について考察する。

３．１　内容

絵本の内容項目を①から④に分類する。項目は以下の通りである。

①ものの絵本（以下、「ものの絵本」と記す）
②生活･あそびの絵本（連続性はみられるが､物語ではない。以下､｢生活･あそびの絵本｣と記す）
③物語（以下、「物語の絵本」と記す）
④色、形、大きい・小さい、多い・少ない、数等、抽象的な概念を表す絵本（以下、「抽象概念の絵本」と記す）

赤ちゃん絵本の分類はさまざまあり、先行研究[9)]に沿うよう考えたが、テーマ別に分類すると１冊の絵本の中に重なるテーマが多く、分類することが難しかった。そのため、本研究では、『こどものとも0.1.2.』が『こどものとも』につながる物語絵本の入り口との位置づけから上記のように大きな括りで「内容」として分類した。

①「ものの絵本」は、テーマとしての統一はあっても、一冊の絵本に連続したつながりはなく、ページを開くごとに一場面、あるいは二場面展開で一つのものが描かれ、絵に対応したものの名前がつけられるものをさす。柴村（2004）のいう「ものづくし絵本」である[10)]。柴村は、この分類に二場面展開で、一冊の絵本としての連続性はないということから、「いないいないばあ絵本」をこの分類に含めている。本研究では、「いないいないばあ絵本」に類する作品は、②「生活・あそびの絵本」に含める。②「生活・あそびの絵本」は、「一場面、あるいは二場面で生活やあそびを展開するもので一冊の絵本のなかでは連続性がない場合」と「連続性はあるが､③「物語の絵本」の選択基準から外れる作品」とする。③「物語の絵本」の選択基準は、以下の通り示しておく。

③「物語」については、「物語の入り口となるもの」という位置づけとする。

「赤ちゃん絵本とは何か」について、仲本（2015）は「赤ちゃん絵本は、主に〇歳から二歳台くらいの絵本が対象とされている。モノを描いた絵本、ことばや音を楽しむオノマトペ絵本、遊びを誘発する絵本、簡単な物語の入り口のような絵本などがある。」[11)] としている。

中村（2015）も「個人差はありますが三歳近くまで、物語絵本の入り口までが赤ちゃん絵本だと思っています。」[12)] と述べている。また中村（2007）は、赤ちゃん絵本を７つのジャンルに分け、その一つを「おはなしの本」として「身の回りのできごとや、生活との接点の濃さを離れ、子どもを物語の世界に連れ出す本」[13)] としている。従って、赤ちゃん絵本は物語を楽しむ以前のもので、「物語の入り口」までのものと捉える。

こうした見解をもとに、ここでは作品の内容について「物語の絵本」として分類するための根拠を次のように考えた。

通常、赤ちゃん絵本において、見開き二場面で完結し、この繰り返しで展開されることが多

い。このテンポが赤ちゃんにはわかりやすい[14)]。しかし、一場面ごとに展開していくものも見られる。こうした絵本について、「内容」や「構成」などの基準を、以下のように設けた。

赤ちゃん絵本においての「物語絵本」とは、

a．見開き二場面で完結し、その繰り返しで展開されていても、二場面の羅列ではなく、前の場面の要素が次の場面へと導き、積み重なり（並列ではない）ストーリーを膨らませて終結部を豊かに盛り上げているもの。

b．起・承・転・結の構成があるとみられ、「起」（始まり）の課題が「承」から「転」を経て解決することで、ストーリー全体を膨らませ、喜びや満足感が伝わる結末（結）のもの。

c．中村のいう「身の回りのできごとや、生活との接点の濃さを離れ、子どもを物語の世界に連れ出す本」

こうしたa.とb.の条件を満たしたもの、あるいはc.の条件にあてはまるものを「物語の絵本」とした。但し、赤ちゃん絵本という枠組みの中であることから、「物語絵本の入り口」といわれるものと考える。

④「抽象概念の絵本」は、色、形、大きい・小さい、多い・少ない等、抽象的概念を表す絵本である。例えば、2008年10月号『おおきいちいさい』（元永定正作）は、「おおきいちいさい」という抽象的な概念をイラストレーションで大きいものと小さいものを対比することで、物の大小について表している。

３．２　家族の登場

『こどものとも0.1.2』には、人間、動物、植物、身の回りの「モノ」が登場する。なかでも、人間、動物の親子が多く描かれている。そこで、本節では、人間と動物の親子の出現、それが父親であるのか母親であるのかを調べた。さらに、家族が描かれている場合、構成されている家族（父母、祖父母、兄弟姉妹等）についても確認した。

３．３　表現

言葉の表現と絵の表現について項目ごとに分類する。

３．３－１　言葉

①オノマトペのみ

②オノマトペなし

③オノマトペとオノマトペなしの併用

オノマトペとは、擬音語(または擬声語)・擬態語などともよばれてきた言葉の総称である[15)]。赤ちゃんは、オノマトペの持つ響きやリズムを好み、また、言葉を獲得する際、言葉の響きとモノとを結びつけながら覚えるのに適していると言われている[16)]。特に日本語は、オノマトペが豊かにあり、赤ちゃん絵本に取り入れられ、赤ちゃん絵本の特徴の一つになっている。

本研究では、オノマトペの分類に際し、絵本の中のオノマトペが音や声を表しているともその様子を表しているともとれる場合があるため、オノマトペの有無について確認し、擬音語（または擬声語）と擬態語の区別はしなかった。オノマトペの種類について詳細なカテゴリーに分けることは今後の課題とする[17)]。

３．３－２　絵（イラストレーション）

絵（イラストレーション）に関しては、以下の分類とした。

①絵
②版画
③切り絵・貼り絵・ちぎり絵
④コラージュ
⑤写真
⑥写真の応用

①の「絵」の分類は、今回は、水彩画、油絵、パステル等の画材の種類に関しては問わず、写真や版画以外のものを「絵」として分類した。③「切り絵･貼り絵･ちぎり絵」と④「コラージュ」の違いについて記す。コラージュは、一般的に「さまざまなものを貼り付ける技法のことをいう」[18)]（紙以外の物もある）が、本研究では、複数の材質の異なるものを切り貼りしたり、描かれた絵の画面に敢えて他の紙を貼り付ける、貼り付けた画面に絵などを描き加えてできた作品をいい、切り絵、貼り絵、ちぎり絵などとは区別した。⑤「写真」は、被写体を写真に撮り、撮影した画像を原画として構成しているものとする。従来、「写真絵本」とよばれてきた作品である。⑥「写真の応用」は、身近なものを撮影した写真に手を加えて原画を作る（写真に目を書き入れ擬人化する等）作品や、アップリケ、刺しゅう、ぬいぐるみ、編みぐるみ等の手芸作品、アルミ板や陶板画の作品等を写真撮影して原画を作成した作品のことである。他にも、立体造形作品を作成し、写真撮影して原画にしたもので、三次元的な表現の「立体イラス

トレーション」[19] とよばれる範疇の作品である。

４．結果と考察

４．１　内容

25年を通してみると（表１）（A)、297冊のうち、①「ものの絵本」は107作品（36％)、②「生活・あそびの絵本」137作品（46％)、③「物語の絵本」36作品（12％)、④「抽象概念の絵本」17作品（６％）であった。

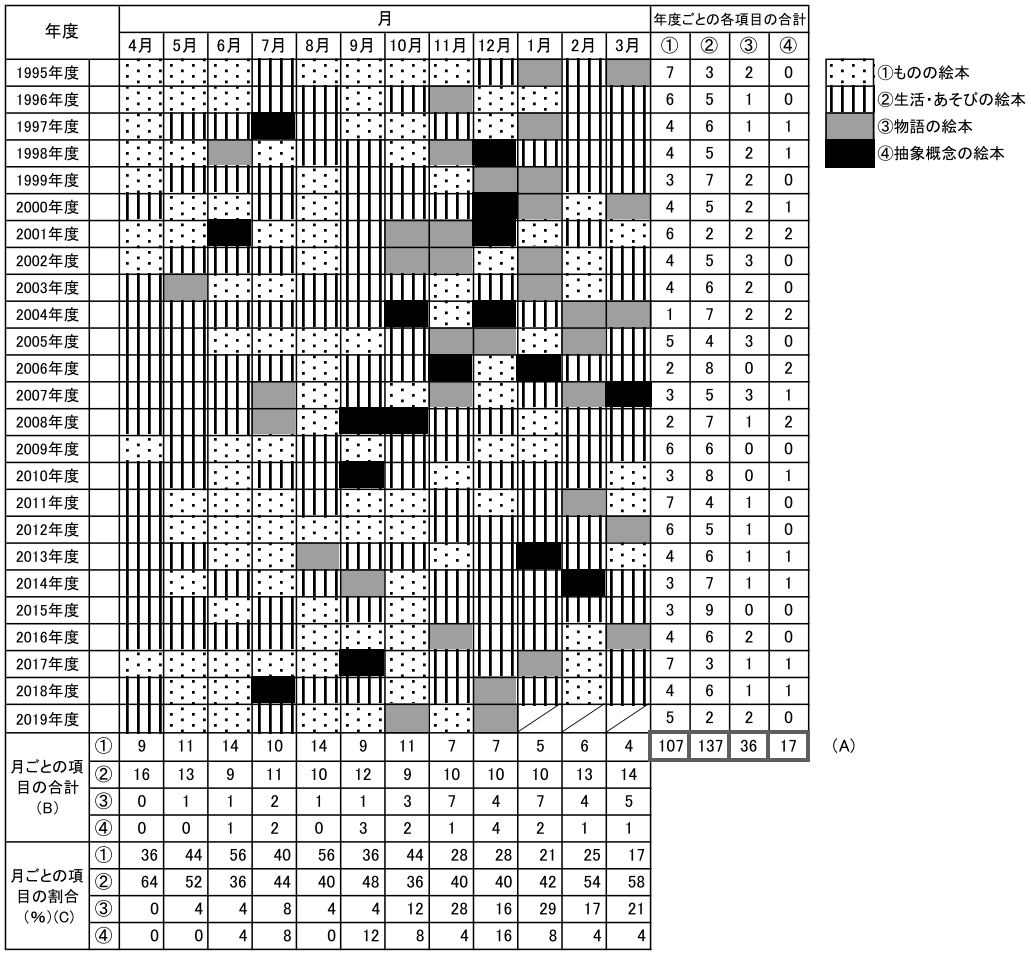
０、１、２歳の赤ちゃんは、身近な物や人を、目で見る、音や声、言葉を聞く、感触を確かめる等の自らの行動と共に、周りの人々との身体接触、言葉のやりとり、一緒に楽しむなどの関わりを通して様々な「モノ」や「コト」を認識しながら成長していく。従って、この時期の赤ちゃんを対象としている『こどものとも0.1.2.』の作品群について、親子で楽しむ絵本の内容が、①「ものの絵本」や②「生活･あそびの絵本」を合わせて全体で80％以上である結果は、首肯出来る。そして､｢物語の絵本｣は､｢ものの絵本｣や「生活･あそびの絵本」が基盤となり、それらの延長線上に発展的に生じたものと考えられる。

次に、月別にみてみると（表１）（B）（C)、①「ものの絵本」や②「生活・あそびの絵本」が４月号～６月号はほぼ毎年度占めていた。特に４月号は、登場人物に、人や動物などが登場し（1997年４月号、2014年４月号は除く)、授乳・目覚める・眠る・遊び・赤ちゃんの一日などであり､シンプルなものであった。これは､初めて『こどものとも0.1.2.』に出会う赤ちゃんと、継続した読者の両者への配慮であると考えられる。初めて読者となる０､１､２歳の赤ちゃんは、「ものの絵本」のように、一つ一つの「モノ」と出会いを楽しむ。加えて、その「モノ」から発展した生活やあそびなどにも興味･関心を広げ､楽しむこともできる。また､継続の読者には、これまでの読書体験から、馴染みになった「モノ」に親しみを持ちながら、その「モノ」を通して「生活や遊び」などを楽しめる。『こどものとも0.1.2.』の基本的な方針と合致している。

他方、③「物語の絵本」は、全体的にみると、10月以降に増えている。半年の読書経験の積み重ねから、①「ものの絵本｣、②「生活・あそびの絵本」の延長線上にある③「物語の絵本」へと広げているものと思われる。

さらに、年代順にみると（年度ごとの合計③)、③「物語の絵本」の出現率は、1995年度から2007年度までの方が、2008年度以降よりも高くなっている。

（表１）『こどものとも０．１．２.』の内容



年度	月												年度ごとの各項目の合計			
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	①	②	③	④
1995年度													7	3	2	0
1996年度													6	5	1	0
1997年度													4	6	1	1
1998年度													4	5	2	1
1999年度													3	7	2	0
2000年度													4	5	2	1
2001年度													6	2	2	2
2002年度													4	5	3	0
2003年度													4	6	2	0
2004年度													1	7	2	2
2005年度													5	4	3	0
2006年度													2	8	0	2
2007年度													3	5	3	1
2008年度													2	7	1	2
2009年度													6	6	0	0
2010年度													3	8	0	1
2011年度													7	4	1	0
2012年度													6	5	1	0
2013年度													4	6	1	1
2014年度													3	7	1	1
2015年度													3	9	0	0
2016年度													4	6	2	0
2017年度													7	3	1	1
2018年度													4	6	1	1
2019年度													5	2	2	0
月ごとの項目の合計（B） ①	9	11	14	10	14	9	11	7	7	5	6	4	107	137	36	17
月ごとの項目の合計（B） ②	16	13	9	11	10	12	9	10	10	10	13	14				
月ごとの項目の合計（B） ③	0	1	1	2	1	1	3	7	4	7	4	5				
月ごとの項目の合計（B） ④	0	0	1	2	0	3	2	1	4	2	1	1				
月ごとの項目の割合（%）(C) ①	36	44	56	40	56	36	44	28	28	21	25	17				
月ごとの項目の割合（%）(C) ②	64	52	36	44	40	48	36	40	40	42	54	58				
月ごとの項目の割合（%）(C) ③	0	4	4	8	4	4	12	28	16	29	17	21				
月ごとの項目の割合（%）(C) ④	0	0	4	8	0	12	8	4	16	8	4	4				

４．２　家族の登場

2014年度を除き、毎年、１回～６回は、人間の親子あるいは動物の親子が描かれた作品が出版されている（表２）。生後４か月くらい～２歳６か月頃は＜再認識の時代＞と呼ばれ、知っているものや知っている場面を絵の中に見つけて気づいて喜ぶ年齢である[20)]。『こどものとも0.1.2.』で親子が描かれる作品の内容は、「抱っこ」や「おんぶ」、授乳や睡眠など、生活や遊びの場面がほとんどである。大人に読んでもらった赤ちゃんが、自らの生活体験を再認識しやすくなっている。特に、年度初めの４月が多くなっており、「内容」で前述したように、初めて購読する読者にとっても継続購読している読者にとっても馴染みやすい内容である。

次に、父親が描かれているかの有無について確認した。人間の父子（家族は含まれない）が

（表２）親子の出現

年度	月																								年度ごとの合計
	4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月		1月		2月		3月		
1995			■	□																□			○		3
1996		□														□				□					3
1997																								□	1
1998										□	■	□													2
1999		□							■									□	■						4
2000		□		□																○	■				4
2001										□		○	■						○	○					4
2002	■	□	■				◎												○						4
2003	■	□				□																			2
2004	■	□		□			■	□																	3
2005	■	□					■	□								□		○							4
2006						□	■	□											○						3
2007			◎	◎								□				□			□						4
2008		□			◎			□																	3
2009		□	■	□		□				○											■				5
2010	■	□											■												2
2011		□			■				○		■											◎			5
2012	■													□	■			□			○				5
2013	○			□					○			□										□	■		6
2014																									0
2015																□	◎	◎					○		3
2016		□				□				□			■			□									5
2017				□		□																		□	3
2018		□		□											■			□		□					5
2019								□																	1
月別合計	7	13	4	8	2	5	4	5	3	4	2	4	3	1	2	5	1	5	5	5	3	2	3	2	

■ 人間の親子
□ 動物の親子
◎ 父親とその子ども
○ 父親が家族の一員として登場

描かれている作品は、４作品（2002年７月号、2007年５月号、2008年６月号、2015年12月号）、人間の父親が家族の一員として登場しているのは、９作品である（1996年３月号、2002年１月号、2003年１月号、2007年１月号、2011年８月号、2013年２月号、2013年４月号、2013年８月号、2016年３月号）。動物の父子が描かれている作品は、３作品（2007年５月号、2012年２月号、2015年12月号）、動物の父親が家族の一員として登場しているのは、５作品（2001年１月号、2001年９月号、2002年１月号、2005年12月号、2009年８月号）であった。いずれにせよ、親子が描かれている作品が、84作品ある中で、（人間と動物の親子が両方とも描かれている場合は１作品と数える。）父親が描かれているのは、人間、動物合わせて18作品であった。それ以外の66作品は、描かれる親は母親である。もちろん、数少ない作品のなかでも優れた作品はみられる。例えば、2012年２月号『ぐうぐうごりら』（神沢利子　文／あべ弘士　絵）は、父子の一日の様子を楽しくのびやかに丁寧に描いている。しかし、男女共同参画社会基本法（1999〔平成11〕年）が制定され、「男女の人権が尊重され、かつ、社会経済情勢変化に対応できる豊かで活力ある社会を実現することの重要性」、「男女共同参画社会の形成を総合的かつ計画的に推

進すること」が求められており、男性の子育て参加や育児休業取得促進の社会にあって、作品数が少ないのは、非常に残念なことである。これまでも姉妹誌の『こどものとも』の作品において性役割の描かれ方について、性差別的であったり、型にはまっている等の批判があった[21)]。子どもたちが絵本の入り口として『こどものとも0.1.2』に出会い、繰り返し読まれることを考えれば、今後の絵本づくりに是非反映してもらいたいものである。次に家族が描かれている作品の登場人物（家族）の構成について調べてみると、３世代までの家族が描かれているのは、８作品である（表３）。子どもは、たくさんの人にかかわって育つ存在である。父母だけの子育てではなく、家族や社会全体で育てる意識も必要であると思われる。

それでも８作品のうち、『おててつなごう』（安江リエ　文／西巻茅子　絵　2013年２月号）は、テーマにおいて評価に値する作品である。この作品に登場する人物は、子ども（男・女どちらとも受け取れる）、「おかあさん」、「おにいちゃん」、「おねえちゃん」、「おじいちゃん」、「おとうさん」である。父、母は家族であることが明確である。しかし、その他の「おにいちゃん」「おねえちゃん」、「おじいちゃん」は、散歩の途中で出会い、「おててつなごう」と子どもが声を掛け、手を繋いで一緒に遊ぶ、散歩するなどである。ここからは、家族関係にあるか否かは断言できない。従って、家族関係かもしれないし、そうではなくて地域住民かもしれない。

『おててつなごう』の折り込みふろくに「作者のことば」として、安江リエの言葉が掲載されている[22)]。

（表３）家族が描かれている作品と登場人物（家族）の構成

出版年月	作品名	作者	登場人物（家族）
2002年1月号	『サカナカナ？』	山村浩二作	父、母、男児、女児
2003年1月号	『おめめとじてね』	伊藤比呂美文／なかがわまさこ絵	父、母、兄、姉、祖父、祖母、赤ちゃん
2004年9月号	『じったん　ばあたん』	なかがわまさこ作	爺、婆
2008年4月号	『だっこだっこだーいすき』	かみじょうゆみこ文／100%ORANGE絵	父、母、姉、兄、祖母
2011年8月号	『まなちゃんのいす』	長野ヒデ子作	父、兄、祖母、母、女児
2013年2月号	『おててつなごう』	安江リエ文／西巻茅子絵	父、おじいちゃん、こども、母、おにいちゃん、おねえちゃん
2013年8月号	『うちわぱたぱた』	杉田比呂美作	父、母、兄、女児
2018年11月号	『ひっぱれば』	長野ヒデ子作	祖父、姉、母、女児

「・・・何万光年宇宙をとんで、このむずかしい時代に地球にやってきた赤ちゃんたち。自分から小さな手をのばして、いろんな人を誘って、いろんな人に見守られて、いろんな世界を歩いてくれたら、こんなに嬉しいことはありません。」

作者は、子どもが色々な人と出会い、その人たちと安心して手を繋ぐことが出来る社会を願ってこの作品を描いていると思われる。そのような社会は、子どもの育ちにとっても、大人の生き方をも楽しく豊かにするものであろう。主人公の子どもが、男・女どちらとも受け取れる点や登場人物の性に偏りがないことなど、ジェンダーにも配慮した作品と思われる。

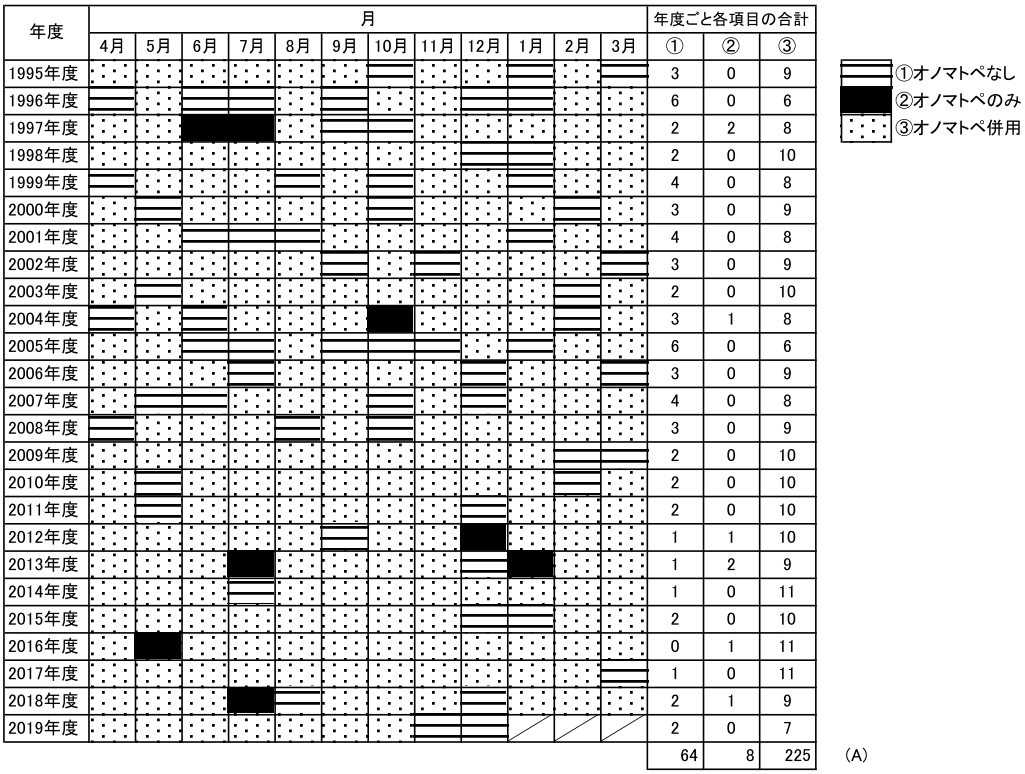
４．３－１　言葉

全体を通してみてみると（表４）（A)、①「オノマトペなし」の作品は64冊（22％)、②「オノマトペのみの作品」は８冊（３％)、③「オノマトペを併用した作品」が225冊（75％）であった。オノマトペのみの絵本８作品のうち、４作品は、生活・あそびの場面で、オノマトペが用いられる作品であるが、残りの４作品〔1997年７月号『ごぶごぶ　ごぼごぼ』（駒形克己　作)、2013年７月号『ほわほわ』（青島左門　作)、2014年１月号『ピリンポリン』（西巻かな　作)、2018年７月号『つんこんぱっ』（こぺんなな　作)〕は、抽象的な形や色の絵に音やリズムの感じられるオノマトペのみが描かれている。これらは、オノマトペ絵本に代表される『もこもこもこ』（谷川俊太郎　文／元永定正　絵　文研出版　1977）の絵本に類するものである。『こどものとも0.1.2.』は、②「オノマトペのみの作品」は少ないものの、③「オノマトペを併用した作品」、オノマトペを言葉に含む作品が多くみられた。

赤ちゃんとオノマトペについて、脇明子（2005）は、「赤ちゃんが最初に耳でキャッチし、認識する言葉の多くは、同音反復によるリズミカルな擬音語・擬態語や、それに似たあやし言葉」だと述べた[23)]。佐々木（2006）は、「オノマトペと抽象画の絵本」『もこもこもこ』（前出）を男児（生後10ヶ月）と読み合った時の様子について、「読み手が放つリズムや音韻と交流しようとする強い意志が見られ、身体ごと共鳴しているようにみえました。」と男児が大声で笑い、はしゃぎ、全身で喜ぶ様子を記している[24)]。中村柾子（2007）も、『もこもこもこ』の出現は画期的で、「絵本の常識を打ち破るような新鮮さで大人も子どもも魅了した」と述べ、さらに『もこもこもこ』や『ころころころ』（元永定正　作　福音館書店　1984）の「音の連なりや絵には、子どもの感覚を揺さぶるような不思議な力」があると記している[25)]。

このように、赤ちゃん絵本における「オノマトペ」の効果が注目され、随所で語られてきた。佐々木はその効果の一つとして、「オノマトペ（擬音語・擬声語・擬態語・擬情語）がゆたかに含まれる、詩のようなテクストが、心地よいリズムとメロディでうたわれることにより、赤ちゃんは日本語の音節を抜き取ったり、音としてのまとまりを認知したりする力を育む」[26)] と考えている。かつてわらべうたを親子で楽しんだように、「新しい日本語のリズムやメロディを生かしたテクストと、それを視覚化した絵」の赤ちゃん絵本が、「赤ちゃんの内面を通した

（表４）『こどものとも０．１．２.』表現＜言葉　オノマトペ＞



年度	月												年度ごと各項目の合計		
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	①	②	③
1995年度													3	0	9
1996年度													6	0	6
1997年度													2	2	8
1998年度													2	0	10
1999年度													4	0	8
2000年度													3	0	9
2001年度													4	0	8
2002年度													3	0	9
2003年度													2	0	10
2004年度													3	1	8
2005年度													6	0	6
2006年度													3	0	9
2007年度													4	0	8
2008年度													3	0	9
2009年度													2	0	10
2010年度													2	0	10
2011年度													2	0	10
2012年度													1	1	10
2013年度													1	2	9
2014年度													1	0	11
2015年度													2	0	10
2016年度													0	1	11
2017年度													1	0	11
2018年度													2	1	9
2019年度													2	0	7
													64	8	225

コミュニケーションの基盤を創り上げる」[27] とも述べている。

しかしながら中村（2007）は、こうした動きから言葉遊びの絵本が続出し、作家が新しい言葉を生み出そうと音そのものを弄り回し、その結果、難解で読みづらいものが創出されていることを懸念した[28]。石井（2010）も「赤ちゃん絵本が刺激過剰で、手詰まりになってきている」ことや、「アイデア勝負でやってきたが、もう一回原点に帰る必要が出てきている」ことを指摘した[29]。さらに、「絵本がアイデアで広がりを見せてきた裏側で、物語が希薄になって」おり、これは赤ちゃん絵本も同じであると述べ、「赤ちゃん絵本に大切なことは何か、原点に帰って考えると打開できるのではないか」[30] と考えている。

本研究でも、2009年度を境にそれ以降は、オノマトペのない通常の言葉のみで語られる「オノマトペなし」の絵本が、１年に２から０作品と少なくなってきている。「物語の絵本」作品が2008年度以降減少している（表１）。このことが、「オノマトペのない通常の言葉のみ」で語られる作品が減少していることとどのように関連するのか、今回は言及するには不十分であるため、今後検証していきたい。

オノマトペは、赤ちゃんが喜び、赤ちゃんの言語獲得にとって効果があるかもしれないが、まだ十分言葉を持たない赤ちゃんに、不必要なオノマトペをたくさん与えることがよいことだとは思わない。大人も赤ちゃんとともに楽しみや喜びを共感でき、子どもに伝えたいと思う絵本を手渡していきたいものである。

４．３－２　絵（イラストレーション）

最後に絵（イラストレーション）についてみていく。

今回、①「絵」の分類に関しては、画材の種類等の詳細な分類を行わなかったこともあり、297作品中237作品と多くを占めた。②「版画」は15作品、③「切り絵・貼り絵・ちぎり絵」は、17作品、④「コラージュ」３作品、⑤「写真」８作品、⑥「写真の応用」17作品であった。『こどものとも0.1.2.』は、写真よりも絵で表現されているほうが多かった。写真絵本の中にも『はるにれ』（姉崎一馬　福音館書店　1979）や『イエペはぼうしがだいすき』（石亀泰郎　文化出版局　1978）等の絵本のように物語性のある作品はある[31)]。しかし、写真の場合、写した一瞬の場面を切り取るため、絵のように「時間の幅」を持って描くことが難しい。丁寧に書かれる絵は、「画家の観察の鋭さがうかがえそれでいて余計な描写がない」[32)]。そのため、赤ちゃんは、丁寧に書かれた絵を見ることによって、語られる言葉を聞きながら、観察眼や考える余地を広げるのではないかと思われる。絵（イラストレーション）の項目でも、『こどものとも0.1.2.』が目指している編集方針に概ねそっているといえる。

（表５）の絵（イラストレーション）の分類表をみると、1995年度から1999年度は、⑥の「写真の応用」がなく、②「版画」や③「切り絵・貼り絵・ちぎり絵」はあるものの、平面に描かれた絵の原画が中心である。しかし、2000年度以降、⑥「写真の応用」が見られ始める。

⑥「写真の応用」の分類は以下の通りである。作品は（資料１）に示す。

（１）身近な「モノ」とその「モノ」に手を加えて撮影し、変化を見せる。「モノ」を写真撮影し、目などを描き加えてキャラクター化して原画を制作する。

（２）絵や版画以外の造形作品の絵本化（アップリケ、ぬいぐるみ、編みぐるみ等の手芸作品やアルミ板でキャラクターを制作し、それを写真撮影して原画を作成する。あるいは、原画を陶板画で作成する等）

（３）立体イラストレーション（立体造形作品を作り、写真撮影して原画を制作する。三次元的な表現）

「写真の応用」とは、絵、版画以外の造形作品を写真撮影したり、そこに手を加えて原画を作成するものである。全体で17作品あった。全体数からすると、5.7％と少ないが、新規性の高

（表５）『こどものとも０．１．２.』表現＜絵＞

年度	月												年度ごとの各項目の合計					
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	①	②	③	④	⑤	⑥
1995年度													11	0	0	0	1	0
1996年度													10	0	1	0	1	0
1997年度													10	1	1	0	0	0
1998年度													12	0	0	0	0	0
1999年度													11	1	0	0	0	0
2000年度													11	0	0	0	0	1
2001年度													10	0	0	0	0	2
2002年度													11	0	1	0	0	0
2003年度													8	1	1	0	0	2
2004年度													10	0	2	0	0	0
2005年度													10	1	1	0	0	0
2006年度													10	1	0	0	0	1
2007年度													10	1	0	0	1	0
2008年度													9	1	0	1	1	0
2009年度													9	1	1	0	1	0
2010年度													8	1	0	0	1	2
2011年度													11	0	1	0	0	0
2012年度													10	0	0	0	0	2
2013年度													9	1	1	0	1	0
2014年度													11	0	0	0	0	1
2015年度													7	1	2	2	0	0
2016年度													9	1	1	0	0	1
2017年度													4	2	2	0	1	3
2018年度													9	1	0	0	0	2
2019年度													7	0	2	0	0	0
													237	15	17	3	8	17

①絵
②版画
③切り絵・貼り絵・ちぎり絵
④コラージュ
⑤写真
⑥写真の応用

い表現方法である。例えば、2018年９月号の『たたんぱたたんぱ』は、色とりどりのスリッパに「目」を貼り付け擬人化し、スリッパと様々な生活小物を組み合わせて、立体的な造形作品を制作している。他方、新しい手法が登場する中でも『かえるさんくわっくわっ』の作者、廣野研一と作品について述べた編集部の言葉、「生物全般に強い興味があり、豊かな知識と鋭い観察眼が確かな描写力を支えていることがよく分かりました。」「…廣野さんのアマガエルの描写には、愛情が感じられるだけでなく、背景などを極力書かないことで、赤ちゃんがアマガエルをじっくり見られるように工夫されています。」[33] が記されている。さらに、『ぼくはいぬ』の作者、杜今日子と作品についてについて述べた「・・シンプルな絵本だけに生き物の姿かたちが何より大切、と作者の杜今日子さん。動物園や博物館に通ってスケッチを重ね、それぞれが持つ空気感まで表現してくださいました。・・・（中略）・・・「きみだあれ？」の問いかけは、犬、猫といった身近なところから始まって、林や里山に住む動物へと広がっていきます。生き物の持つ美しさが、まっすぐ赤ちゃんに伝わりますように。」[34] という言葉もある。これらはいずれも、『こどものとも0.1.2.』についての基本的な姿勢であると思われる。絵本についての

（資料１）「写真の応用」

（１）身近な「モノ」とその「モノ」に手を加えて撮影し、変化を見せる。「モノ」を写真撮影し、目などを書き加えてキャラクター化して原画を制作する等	
・2010年11月号『ぽんちんぱん』柿木原政弘	いろいろなパンの一部をちぎって＜目や口に見立て＞顔を作り、キャラクターを作成する
・2016年12月号『おっととっと』柿木原政弘	積み木を色々に積んで写真撮影する。その積み木の写真に顔を描き、名前＜はるちゃん等＞を付けてキャラクター化する
（２）絵や版画、切り絵・貼り絵・ちぎり絵以外の造形作品の絵本化 アップリケ、ぬいぐるみ、編みぐるみ等の手芸作品やアルミ板で登場人物を制作し、それを写真撮影して原画を作成する。あるいは、原画を陶板画で作成する等）	
・2000年7月号『くっくくっく』 長谷川摂子文／小川忠博写真／他	フェルトで靴を制作する。目をつけ、擬人化する
・2001年6月号『あっちみてこっちみて』 なかつじえつこ　作	針金やぼたんでヒト型を作成する
・2002年１月号『サカナカナ』山村浩二　作	蜜蝋粘土を用いて登場人物を作成し、アクリル板に載せ光を当てて撮影する
・2003年10月号『ロボットロボット』 こかぜさち　文／わきさか　かつじ　絵	段ボールにロボットを描き、ロボットを型取り、登場人物を作成する
・2004年１月号『ごろんごゆきだるま』 たむらしげる　作	アップリケで登場人物を作成する
・2010年6月号『けろけろぴょん』 田村ゆう子　作	アップリケ・刺しゅうで登場人物や背景を作成する
・2012年9月号『まんまるまんまる』 田村ゆう子　作	アップリケ・刺しゅうで登場人物を作成する
・2012年12月号『ふわふわぐーぐー』 たむらしげる　作／田村ゆり　編み物	編みぐるみで登場人物を作成する
・2014年9月号『やもりのモリー』 田村ゆう子　作	登場人物のぬいぐるみと背景のキルトを作成する
・2017年7月号『ピッピちゃん』 田村ゆう子　作	アップリケ・刺しゅうで登場人物を作成する
・2017年10月号『じゅうじゅうじゅう』 あずみ虫　作	アルミ板で登場人物を作成する（登場人物の形に切って着色）
・2017年11月号『かばんばん』 尾崎玄一郎・尾崎由紀奈　作	カーペット素材で登場人物(かばん)を作成し、写真撮影する。写真の原画と紙、布、アルミ箔等を貼り付け、線を描き込む等して原画を作成する
・2018年12月『ゆきがふってきたの』 南塚直子　作	原画が陶板画
（３）立体イラストレーション 立体造形作品を作り、写真撮影して原画を作成する。三次元的な表現が際立つもの	
・2007年2月号『かんかんかん』 のむらさやか 文／川本幸 制作／塩田正幸 写真	身のまわりにある素材（布やビニール等）で食べ物や乗り物、動物等の登場人物を作成する
・2018年9月号『たたんぱたたんぱ』 のむらさやか文／川本幸制作／塩田正幸 写真	カラフルなスリッパに「目」を貼りつけ、登場人物を作成する。スリッパと様々な生活小物を組み合わせて立体造形作品を制作する

基本的な姿勢を持ちつつも月刊絵本という宿命から、出版社としては、新しいことへの挑戦や、作家の新人発掘も必要となってくるであろう。そういった課題のなかで、いかに「本物をていねいに描いた絵」を届けるかが今後も鍵となってくるであろう。

まとめ

福音館書店の月刊絵本『こどものとも0.1.2』は、25年間、本の形態、造本は、一貫して制作されてきた。内容や表現は、身近なものや、生活・あそび等の子どもにとって身近な生活場面が概ね描かれていた。初期の編集者の意図である「親子で楽しめる」「言葉に親しめる」「本物をていねいに描いた絵を見せる」に沿いつつ、25年間制作してきた。これは、一定評価をすることができる。しかしながら、近年では新しい内容や表現が試みられている。元来、０歳から２歳の乳幼児期は、目覚ましい発達を遂げる時期である。発達の幅が大きい０、１、２歳児がそれぞれに楽しめるという絵本作りは、困難を極めると思われる。また、１年間の購読期間に子どもは大きく変化する。こうした二重の課題に加え、新しい読者ばかりでなく、継続の読者もいる。読者を飽きさせないで、さらに継続購読をさせるための課題も加わるなか、１年間に12冊の作品を作り続けていくことの大変さが窺える。

ここで、2014年度から変更された『こどものとも0.1.2』４月号の折り込みふろくをみておく。2014年４月号から折り込みふろくの最後のページに「編集部よりごあいさつ」のページが付加される。これまでも新年度の始まり４月号では、折り込みふろくの「編集部だより」の冒頭に、簡単な挨拶文が添えられていた。しかし、１ページを全部使って「編集部よりごあいさつ」が述べられるのは2014年４月以降であり、毎年４月号は同じ形式で、内容は以下の通りである。

「編集部よりごあいさつ」

「こどものとも０．１．２．」をご購読いただき、ありがとうございます。ご家庭でこんなふうに読んでいただけたらという願いを込めて、「こどものとも０．１．２．」のご紹介をいたします。

「無理強いせず、ゆっくりゆっくり読んであげてください」

赤ちゃんは、初めは絵本を見せても、ページを順々に読ませてくれないでしょう。一つの場面だけ見てパタンと閉じたり、ときにはなめたりかじったりするかもしれません。それは当たり前の反応なのです。そんな赤ちゃんの反応につきあいながら何度も何度も絵本を読んであげ

ると、赤ちゃんはだんだんに絵本に慣れていきます。赤ちゃんのペースに合わせ、赤ちゃんに語りかけながらゆっくりゆっくり読んであげてください。

「親子の間にコミュニケーションが生まれます」

膝の上に赤ちゃんをのせて、ゆっくり絵本を読んであげていたある日。赤ちゃんはにっこり笑ったり、時には声をたてて笑ったり、お気に入りの場面を指さしながら何かつぶやくかもしれません。そのとき、大人もきっとうれしい気持ちになることでしょう！このようにして、赤ちゃんと大人の間に、コミュニケーションが生まれるのです。喜びの時間が訪れるのです。

「質の高い絵本を赤ちゃんに」

赤ちゃんが人生で最初に出会う絵本が、絵も中身も薄っぺらなものでは残念です。絵も文章も、練りに練った質の高い、美しいものを赤ちゃんに届けたい・・・・そのような思いで、私たちは「こどものとも０．１．２．」をつくっております。１年間、赤ちゃんの成長に合わせて、バラエティ豊かな絵本を用意していますので、(筆者下線) どうぞ年間通してお楽しみください。絵本を読んであげることで、親子で豊かで幸せな時間を持ってくださることを願っています。

上記の年度初めの挨拶文は、語尾や言葉の変化はあるが、大意は変わらず、2019年４月現在まで継続している。下線の「バラエティ豊かな絵本を用意」しているという文言は、2013年４月までは見当たらなかった。今後、『こどものとも0.1.2.』が、「質の高さ」と「美しさ」と「バラエティの豊かさ」を追求するなかで、どのような作品になっていくのか、今後も継続してみていきたい。

今回の研究では、創刊号から2019年12月現在の297冊の『こどものとも0.1.2.』を概観するにとどまった。詳細な分析については、今後の課題とし、引き続き『こどものとも0.1.2.』の研究を通して、乳幼児向き絵本「赤ちゃん絵本」とは何かを追求していきたい。

謝辞

本論文の作成に当たり、貴重な資料、およびご助言をいただきました京都女子大学大学院講師　永田桂子先生、元大阪人間科学大学教授　村川京子先生に心よりお礼申し上げる。

脚注

1）「こどものとも」100号、『ようちゃんともぐら』の附録（1964年７月号）最終ページに紹介されている。（うさこちゃんシリーズのうち、８冊の表紙写真や、タイトル、価格などが紹介されている。）

2）窪田美鈴、「『松谷みよ子あかちゃんの本』シリーズの絵本表現－画面展開表現分析と作り手へのインタビューからの一考察－」、『国際児童文学館紀要（19)』、2006　p.2

3）出席者：那須辰造、松谷みよ子、田島征三、三越左千夫、市村久子、鳥越信（司会）　日本児童文学協会編「座談会　絵本の世界（特集・絵本・その２）」『日本児童文学』盛光社　1968　pp.40－41、pp.52－53

4）園田博文「『こどものとも0.1.2.』『0.1.2えほん』の研究－動物に関わる育児語とオノマトペを中心に」『山形大学教職・教育実践研究』11、2016　pp.39－48

5）永田桂子『CORE』第３巻第２号　NO.6　商品科学研究所、1976　pp.25-26

6）田中秀治「赤ちゃん向け月刊絵本の創刊－「こどものとも012」について」『ようこそ！絵本の世界へ《とっておきの一冊》とめぐりあうために』國文學編集部　編　学燈社、2006　p.139

7）前掲６）p.139

8）「創刊のごあいさつ」月刊「こどものとも0.1.2.」（1995年４月１日発行通巻１号）折り込みふろく　福音館書店

9）柴村紀代編集責任者『アンケートからみえてきた赤ちゃん絵本226冊』札幌中央図書館絵本研究会、1998 pp.36－37では、絵本の内容をテーマ別に分類し、テーマを大きく分け、赤ちゃんの認識を助けるもの（「認識」）、赤ちゃんの生活環境を取り上げたもの（「環境」）、赤ちゃんの感覚を育てるもの（「感覚」）の３領域に分類している。それぞれを細分化し、そのどれにもはいらないものを「テーマ外絵本」とし、概ね物語を含むので「物語」として括っている。その他、中川素子他『絵本の事典』朝倉書店、2011　p.323 では、「いないいないばあ絵本」、「知育えほん」、「しつけ絵本」、「育児絵本」等の分け方がある。

　永田桂子　前掲５）のなかで分類に「題材」を使用しているが、これも、本研究では分類が難しかったため「内容」とした。

10）柴村紀代・清水貴子「赤ちゃん絵本の対象年齢について－ものづくし的理解から物語理解へ－」『藤女子大学紀要』第42号第Ⅱ部、2004　pp.51－58

11）仲本美央「赤ちゃん絵本と周辺研究の動向（特集　赤ちゃん絵本とブックスタート）」『絵本ブックエンド2015』絵本学会機関誌編集委員会　絵本学会、2015　p.17

12）出席者：中村柾子、福本友美子、関谷裕子、申明浩（司会）「座談会　赤ちゃん絵本の現状と魅力（特集　赤ちゃん絵本とブックスタート）」『絵本ブックエンド2015』絵本学会機関誌編集委員会　絵本学会、2015　p.23

13）中村柾子「赤ちゃん絵本の動向と研究課題」『絵本ブックエンド2007』絵本学会機関誌編集委員会　絵本学会、2007　p.51

14）白須康子「０～３歳児を対象とした絵本の選書～心理学的発達対応と形態学的発達対応」『神奈川大学人文学会誌』159号、2006　pp.59－86

15）小野正弘（編）『日本語オノマトペ辞典』小学館、2007　p.7

16）佐々木宏子『絵本は赤ちゃんから　母子の読み合いがひらく世界』新曜社、2006　pp.8-10

17）古市久子「こどもの動きを引き出すオノマトペ絵本」『東邦学誌』第43巻２号　愛知東邦大学、2014　のなかで、１．音・声の再現、２様子の描写、３イメージの表現、４言葉遊び、５動きを表す、6大小／速遅／重軽、７珍しいオノマトペ、８オノマトペ図鑑、９予期／期待／連想、10心の状態と10のカテゴリーにわけ詳細に分析している。

18）和田直人「コラージュ」今井良朗、中川素子（編）『イラストレーション／絵本』武蔵野美術大学出版局、2002　p.72

19）前掲18）久保村里正「立体イラストレーション」p.75「立体イラストレーションとは、内的なイメージ

情報を伝達することを目的として作られたオブジェ（立体造形物）と、それを写真撮影した図版のことである。一般的にイラストレーションというと、本などの印刷媒体に用いられる挿絵（描かれた絵）を連想するが、広義の意味でのイラストレーションは、メディア（情報伝達媒体）に用いられている図版全般のことであり、そういう意味では写真などもイラストレーションの範疇だということができる。立体イラストレーションに用いられるオブジェは、立体だけでなく半立体（レリーフ）も含まれ、おもに樹脂・粘土・金属・木・紙・布などを材料として、素材のもつテクスチュアを生かして制作される。実際にオブジェを立体イラストレーションとして本などの印刷媒体に利用する場合には立体のままでは使用できないため、撮影しなければならないが、背景や照明などをセッティングし、その情報を空間として撮影することによって普通のイラストレーションにはない、３次元的な表現が可能なのである。・・・・」と書かれているが、本稿では特に三次元的表現が際立つ作品を取り上げた。

20）永田桂子『よい「絵本」とはどんなもの？』チャイルド本社、2007　pp.18-19

21）三宅興子（編）『日本における子ども絵本成立史―「こどものとも」がはたした役割―』ミネルヴァ書房、1997　pp.314-315

22）「絵本のたのしみ―編集部だより―」月刊「こどものとも0.1.2.」（2013年２月１日発行通巻215号）折り込みふろく　福音館書店、p.1

23）脇明子『読む力は生きる力』岩波書店、2005　p.38

24）佐々木宏子『絵本は赤ちゃんから―母子の読み合いがひらく世界』新曜社、2006　pp.9-10

25）中村柾子「赤ちゃん絵本の動向と研究課題」『絵本ブックエンド2007』絵本学会機関誌編集委員会　絵本学会、2007　pp.51-52

26）前掲24）p.236

27）前掲24）p.236

28）前掲25）p.52

29）出席者：石井光恵、菅原幸子、生田美秋（司会）「新刊座談会　絵本の最新動向―2009年」『絵本ブックエンド2010』絵本学会機関誌編集委員会　絵本学会、2010　p.84

30）前掲29）p.85

31）中川素子、吉田新一、石井光恵、佐藤博一（編）『絵本の事典』朝倉書店、2011　p.335　写真絵本

32）前掲20）pp.99-100

33）「絵本のたのしみ―編集部だより―」月刊「こどものとも0.1.2.」（2015年８月１日発行通巻245号）折り込みふろく　福音館書店、ｐ.8

34）「絵本のたのしみ－編集部だより－」月刊「こどものとも0.1.2.」（2018年10月１日発行通巻283号）折り込みふろく　福音館書店、p.8

参考文献

三宅興子（編）『日本における子ども絵本成立史―「こどものとも」がはたした役割―』ミネルヴァ書房、1997

鳥越信（編）『はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅲ―戦後絵本の歩みと展望―』ミネルヴァ書房、2002

中川正文監修・京都女子大学児童文化学会（編）『児童文化の伝統と現在Ⅲ』ミネルヴァ書房、2006

*滋賀短期大学

**京都市洛西図書館

***子どもと文化研究会